

社会貢献と起業活動

—21世紀アジアにおける国際協力とNGOの役割 第3回—

日時：2009年1月24日（土）13：30～

場所：国士舘大学 梅ヶ丘校舎 34B301教室

若林克彦（国士舘大学学長 / アジア・日本研究センター長）

大学は、高等教育機関として教育・研究の成果を社会に還元し、社会貢献をしていかなければなりません。しかし、本学の社会貢献活動は、まだ十分とは言えません。先生方や個々のグループが主導して取り組んでいるのが現状です。その中でも、学生の起業に関しては、本日の報告が学内における大きな一例であります。この発表の前に、教学の理念である「活学」に関連した実践教育や社会活動に関連した実践教育の一端を紹介します。

● 「活学」と実践教育

国士舘の教学の理念からご紹介したいと思います。私学「国士舘」は吉田松陰の松下村塾を範として、「活学を講ずる」教育道場として、大正6年に創設されました。それ以来、本学園は「活学」を教学の理念として継承してきました。「活学」とは、皆さんが大学で学んだことを知識レベルにとどめるのではなく、実際に社会で広く活用・実践していくことです。社会において自ら課題を発見し、解決できる能力を有し、持続可能な社会や人間の幸福に貢献できる人材の養成を目指しています。学生が自主的に学ぶ意欲を起こすことを重視し、知識を知恵に発展させて実践でき、知識や技術を単に習得するだけにとどまらない応用力を養成するよう努めています。

● 実践教育の一例：小型フォーミュラカー

ここで、「活学」の実践教育例をご紹介します。1997年に小型フォーミュラカーの設計・製作プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、学生だけで構成されたチームがフォーミュラカーを設計・製作し、アメリカと日本で行われているフォーミュラSAE競技会（F-SAE）および全日本学生フォーミュラ大会（F-SAEJ）に参加することを目標にしています。いわゆる競技会参加型のPBL（Project Based Learning）実践教育です。

F-SAE及びF-SAEJは、デザイン（設計）、コスト及びプレゼンテーションの静的審査、アクセラレーション、スキッドパッド、オートクロス、エンデュランス及び燃費の動的審査の種目よりなり、各種目の評価と総合的な評価で競い合うものです。学生は仮想的な企業運営をしながら車を製作するので、チームは企業と同じような組織になっています。学生が企業の運営と実践的な知識や経験を身に付けられるように配慮されています。学生は、フォーミュラカーのコンセプトを決定し、既存の製作車両を評価しながら問題点を抽出し、改良点を設計目標に加えます。そしてコンピュータによる各種性能予測シミュレーションならびに重量および強度計算を行い、設計目標を満たす車両設計や3次元CADによるレイアウトを経て車両を製作し、完成させます。

国士舘大学チームの2007年大会の成績は非常によく、アメリカ大会では130チーム中11位（過去の日本チームで最上位の成績）、日本大会では2位でした。フォーミュラカーの設計に際しては、多くの解析ソフトを駆使して、常に独創性や安全性、高出力化や軽量化、高性能化や耐久性、低コスト化、デザイン性、商品性等を考慮しなければなりません。またチームワークの重要性を学び、米国大会に参加することにより、豊かな国際性と英語能力を身につけることができます。つまりこのプログラムは、常に新しい技術に挑戦し、開発過程で発生した問題を、グループ作業を通して完全に解決していく能力を無理なく修得していくように配慮されています。

● 実践教育の一例：川・駅などにおける社会活動

国士舘大学理工学部都市河川研究室が行っている活動を紹介します。この活動には、川で遊び学ぶ親子体験学習と駅・みどりと花いっぱい運動があります。社団法人土木学会関東支部などの協力を得て、2005年から毎年夏に開催しています。例えば、「第4回体験学習」を、「第9回川での福祉と医療と教育の全国大会」に併せて2008年9月6日に開催し、城山小学校など4校から160人もの方にご参加いただきました。駅・みどりと花いっぱい運動は、駅周辺のプランターに花の植え付けと植え替えの作

業をするもので、2007年から開催しています。今年は豪徳寺駅の植え付け作業や下高井戸駅の植え付けを行い、留学生も参加しました。

今後も国士舘大学は、地域に愛される大学として、地元の小学校の生徒さんや住民の方々と連携しながら、区役所および本学世田谷キャンパス周辺の環境づくりに貢献していきたいと考えています。